
量子的な彼女

渡部拓也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

量子的な彼女

【Nコード】

N2912P

【作者名】

渡部拓也

【あらすじ】

俺の部屋で量子的な彼女が対生成した！

戸惑う俺とマイペースな量子じゆんじさんの量子力学的ラブコメ。

第1話「対生成」

彼女「こんにちは」

男「……は？」

彼女「私は量子」

彼女は素っ裸で俺の部屋で正座していた。

俺は意味も分からず、きょとんと彼女を見つめていた。

俺「あの、俺の部屋で何してるんですか？」

量子「さっきここで生成した」

意味が分からなかった。

栗山千明みたいな人……DMM的な？

追い出そうにも、裸のまま放り出せば大変なことになる気がする。

俺「なんで裸なんですか？」

量子「生成したばかりだから」

生成。

量子が生成。

量子力学的な？

俺「でもここ、俺の部屋なんで」

量子「はい」

俺「はいじゃないが」

第2話「シユレディングアの猫」

とりあえず俺は彼女の服を買いに出かけた。
襲えばいいって？

そんな度胸があればこの歳になってまだ童貞を貫いてはられない
ぜ、ははっワロス。

女物の服を買うなんて初めてだったからめちやくちや恥ずかしかっ
たけど、俺も人がいい。

あの安アパートに住み続けるには、なんとかしてでも穩便に彼女に出
ていってもらわないといけない。
痴漢だとかレイプ魔だとかに間違われたらおしまいだ。

俺「あの、まだいます？」

ドアを開けたら、彼女が倒れていた。

俺「ちょ……なにこれ」

俺が卒倒してしまいそうだった。

この状況、大家にでも見られたら、
女連れ込む 素っ裸で放置 女死亡 ムシヨ暮らし
って押尾先生か！

やばい。

非常にやばい。

俺はいったんだアを閉めて冷静に考えた。

結論。

どうしようもない。

そつだ、とりあえず息があるか確認しないと。

ドアを開けた。

量子「こんにちは」

俺「……え？ 生きてるの？」

量子「生きてる」

俺「おどかさないでくださいよ……死んじゃったかと思ったじゃないですか」

量子「はい」

俺「服買ってきたんで、これ着て出てってください」

その間、俺は郵便受けを見に行った。

帰ってきたら、

俺「またですか。もう引っかかりませんよ」

反応がない。

もう服を着てくれてたので、俺は彼女の脈を確かめてみた。

俺「死んでるわけない し、死んでる！」

俺は逃げ出すように部屋を出た。

それからそろーっと部屋をのぞき見る。

俺「……やっぱり死んでる」

ドアを閉めて、また開ける。

正座している彼女がいる。

俺「……生きてる」

俺「どういうことですか」

量子「私は生きてて、死んでる」

俺「……はい？」

量子「私は猫」

俺「……はい？」

もしかして、シュレディンガーの猫？

ということは、俺は彼女から目を離すたびに生きてるか死んでるか観測しないとだめってこと？

俺「……ランダムで死んでるとか、人間じゃねえ」

第3話「トンネル効果」

しょうがないので、俺は彼女を交番に連れていくことにした。

俺「あとは警察に任せますんで」

量子「はい」

信号待ち。

もうしばらく行ったら交番だ。

俺「つて、ちょー！」

彼女がふらふら道路に飛び出している。

俺「危ないですよ！」

そこに大型トラックが。

間に合わない。

俺は思わず目をつむった。

そしておそるおそる目を開けると、

道路の真ん中に彼女が突っ立っていた。

俺「早く、こっちに！」

次の瞬間

突っ込んできた車を、彼女がすり抜けていた。

俺「……今度はトンネル効果か」

こんな人（？）を警察に突き出して、どう説明すればいいのやら。
俺の頭がおかしいと思われるに違いない。

だから、俺は仕方なく彼女と部屋に戻った。

第4話「パウリの排他原理」

彼女との生活が始まった。

まあ、悪い気はしない。

笑わないし喋らないけど、話しかければ反応がある。

第一、美人だ。

恋人ができたみたいで、正直嬉しかった。

俺「今日はデパートに行きます」

量子「はい」

俺「好きな服買っていいから」

量子「はい」

俺が買ってきた服は本当に似合っていないくて、量子さんに申し訳ない。

と行ってどこに買いに行けばいいのか分からないので、彼女と一緒にデパートにあるユニクロに。

エレベーターに乗り込むと、量子さんが突然気が狂ったようにあとから乗ってくる人たちを突き飛ばし始めた。

俺「ちょっと、何してるんですか！」

俺の言葉も聞かず、量子さんはひたすら乗り込もうとする人を外へ突き飛ばす。

中には俺と量子さんの2人しかいないのに。

俺「すみません、ちょっと、あの、すみません！」

俺は必死で頭を下げ、量子さんを止めようとした。

そのうち誰も乗ろうとしなくなったので、量子さんの奇行も収まった。

エレベーターは最上階へ。

俺「何なんですか、いきなり」

量子「ここには2人しか乗れない」

俺「そんなことないですよ。定員10名って書いてあるじゃないですか。2人きりになりたいっていうのなら分かりますけど……そんなわけないでしょうけど……」

量子「パウリに訊いて」

俺「……はい？」

パウリといえば、排他原理。

簡単に説明すれば、複数の粒子は同じ空間を占めることができないってやつだ。

このエレベーターには物理的に俺と量子さんしかいられないのだと。なるほど。

俺は量子さんの行動に納得して、服を買いに行った。

そして財布が爆発した。

第5話「ハイゼンベルグの不確定性原理」

今日は友達の車を借りて、量子さんとドライブ。

量子さんからは全然何も言っただけなのに、俺が誘えばついてきてくれる。

俺「運転するの久しぶりなんです」

量子「はい」

俺「安全運転するんで安心して下さいね」

市内をぐるぐる回っているうちに、なんだか飛ばしたくなってきた。

俺「高速乗りますけどいいですか？」

量子「はい」

量子さんは本当にいつもこんな反応しかしてくれない。

でも、ずっと独り身だったからか、反応があるだけで浮かれてしま

う。

60キロ、80キロ、100キロと車をぶっ飛ばす。

この爽快感がたまらない。

俺「どうですか　って、えっ、量子さん!？」

思わずブレーキに足がかかりそうになったのを踏ん張り、俺は助手席を見て呆然とした。

量子さんがいない。

ドアを開けて飛び出してしまったのだろうか。

でも、時速100キロの車から飛び出せば……

そんなこと、考えたくもなかった。

俺はブレーキを踏みながら、不安を戦いながら、量子さんのことを考えていた。

まさか後部座席に移動したわけじゃないだろう。

可能性としてはただ一つ、車から……

いやいや。

ありえない。

ドアが開けば気づくはずだ。

俺「量子さん……!」

量子「はい」

俺「え」

助手席に、量子さんがいた。

俺「えっ、あの……どこに?」

量子「ここに」

どういふことだ?

時速は60キロまで落ちて、俺は車線変更しようとしてウィンカーをつけた。

俺「びつくりさせないでくだ　　って、量子さん!?!」

またいない。

そのとき、俺はひらめいた。

これはハイゼンベルグの不確定性原理だ。

だから、俺は速度計をタオルで隠してから、ちょっとスピードを上げて助手席を見た。

俺「……やっぱり」

量子「はい」

俺「もう、驚かさないでください」

ハイゼンベルグの不確定性原理、つまり、速度が分かっているとき、位置を特定できない。

また、位置が特定できているとき、速度が分からないというやつだ。

俺「……ほかに何かあれば教えといてくださいよ」

量子「はい」

たぶん、教えてくれないだろうけど。

第6話「負の時間」

ショッピングモールで買い物。

本当の恋人同士みたいだ。

量子さんにはその気はたぶんないだろうけど、俺はこの毎日が楽しくて仕方ない。

量子さんはほとんど感情を表に出さない。

でも、最近、自分からほしいものを教えてくれるようになった。

何が食べたいとか何がしたいとかは口に出しては言わないけれど、指差したり、俺の服を引っ張ったりしてアピールしてくれる。

それがとてもかわいい。

だから、今回は量子さんの行きたいところ、ほしいものを優先。

最初に入ったのは服屋だった。

広くて、客もたくさんいる。

量子さんの指示どおりワンピースとジーンズを手に取り、鏡の前で体に合わせてあげる。

俺「どつちも似合ってますよ」

量子「はい」

俺「ジーンズなら上はキャミソールとかどうですか？　これから暑くなりますし」

量子「はい」

俺「このままちょっと待っててください」

俺は量子さんのためと恥ずかしさを押しきり、蜂蜜色のキャミソール

ルを持ってきた。

最近俺が目を離しても量子さんが死んでいることがほとんどないので、生きているだろうと思いついてしまっている。ま、それが幸せってやつだ。

だって俺、量子さんのこと……

俺「って、量子さん！ こんなところで死んじゃわないでください！」

俺は量子さんを抱きかかえ、人目を避けるため試着室に逃げ込んだ。いったん目をそらし、量子さんが生き返ったのを確認。いや、正確には観測して生きている状態に収束させた。

俺「ダメですよ、あんなところで死んじゃ」

量子「私のせいじゃない」

俺「それはそうですけど」

そして俺は気づく。

こんなに狭いところで2人きり。

俺「あ、ごめんなさい、すぐ出ます。これ、持ってきたんで試着してみてください」

その瞬間、俺は息が止まるかと思った。

もしかしたら心臓も止まっていたかもしれない。

量子さんに抱きつかれていた。

っていうか、おっぱいが。

俺「……量子さん？」

量子さんは何も言わない。
ただ俺を見上げ、見つめている。

……いいのか？
誰かに見つかるかも。

いや、パウリの排他原理だ。
試着室は2人だけの空間。

めちゃくちゃドキドキしてきた。

俺は量子さんを抱きしめた。
柔らかい。
いいにおい。

自然と、唇を近づける

俺「重い」

両手にかかる体重が、急に重くなった。
いや、違う。

量子さんの体が浮き上がっている。

いや、それも違う。

俺「量子さん……？」

なんと量子さんの顔がだんだん幼くなり、体も縮んでいっているのだ。

それを俺が抱きかかえているのだから、重く感じて当然。
おっばいも離れていってしまった。

俺「あの、これ、どういうことですか」

量子「わからない」

声も幼い。

名探偵のごとく縮んでしまった量子さんを抱いたまま、俺は考えた。

……なるほど、分からん。

俺のロリコン魂が幻覚を見せているのか？

でも、小さい量子さんもかわいい。

このまま俺は小さい量子さんと一緒に帰らないとダメなのか？
たぶん、家に着く前に署に連行されているだろう。

と、そのうち量子さんが成長し始めた。

ぐんぐん大きくなり、そのうち元に戻った。

おっばいも。

俺「……量子さん？」

量子「はい」

俺「……さっきのは？」

量子「私」

この腕には小さい量子さんの感触がまだ残っている。

量子「私は時間の矢には縛られない」

俺「……はあ」

そうだった。

ニュートン力学にも量子力学にも、マイナスの時間、つまり時間の逆行を制限する法則も原理もなかった。

ということは。

ということとは。

天国？

俺がよこしまなことを考えているうち、量子さんが外に出ていってしまっていた。

慌てて追いかけると、量子さんはまた死んでいた。

第7話「反物質」

俺「どこか行きます?」

反応なし。

量子さんが反応しないときは乗り気でないということだ。傍から見れば、何の感情も感じ取れないだろう。

でも、今の俺は量子さんの感情の機微がつぶさに分かる。

俺はフラインマン物理学なんていう大学の講義のために買った本を読んでいる量子さんを横目に、VIPでつまらんSSを書いていた。

幸せな毎日。

バイトから帰れば、量子さんが迎えてくれる。ときどき死んでいるけれど。

でも、量子さんがここで生成してくれて本当に嬉しい。灰色の人生が、バラ色になったから。

このまま2人で生きていければいいな、と心から思う。分かってはいる。

永遠に続くことはない。

彼女は量子的だから。

タイピングする俺の手が、なぜか勝手に止まった。泣いてしまいそうだった。

量子さんがいなくなってしまうことを考えて。

俺「量子さん」

量子「はい」

俺「それ、面白い？」

量子「はい」

だから、伝えようと思う。

俺「ちょっとこっち向いてほしいです」

量子「はい」

俺「量子さん、今さらだけど、俺、量子さんのこと、愛して」

ドアが、けたたましい音を立てて開いた。

最悪のタイミングだ。

俺「大家さん？ ノックもなしに……って、え？」

俺は目を疑った。

そこにいたのは、量子さん。

俺「量子さんが、2人……？ ドッペルゲンガー？」

同じ顔の、同じ服の、同じ量子さん。

量子「……あれは、反私」

俺「……反量子さん？ どういう意味ですか」

量子「私がここで生成したとき、一緒に生まれた」

そうか。

反物質。

対生成が起きるとき、粒子と反粒子が生成される。

粒子は、量子さん。

反粒子は、反量子さん。

2人はほとんど同じで、少し違う。

第8話「対消滅」

いや、待て。
まずい。

俺はとつさに量子さんを守るために前に立ちはだかった。

俺「反量子さん、近づかないでください」

反量子「どうして？」

俺「分かってるんでしょう？　ここで2人が衝突したら、どうなるか」

反量子さんはにやりと笑った。

量子さんが絶対にしない、気味の悪い顔つき。

反量子「ええ、もちろん。そのために来たのよ」

俺「させません。俺は量子さんのことを愛してる。あなたに奪わせはしない」

反量子「あらあら、攻撃的。わたしも量子なのよ？」

俺「違う、あなたはあくまで反量子さんだ。俺の知ってる量子さんじゃない」

俺は反量子さんをにらみつけた。

だが、反量子さんは軽くないなし、一歩、中に入ってくる。

俺「近づくな！」

反量子「怖いわね。わたしはあなたじゃなくて、量子に用があるのよ」

俺「……帰ってください」

反量子「そうじゃないわ。帰ってきたのよ、ここに。わたしと量子が対生成したとき、わたしだけが遠くに飛ばされた。そして、やっとここに辿り着いたの。さあ、そこをどいて。いえ、どこまでもないわ。トンネル効果で、あなたなんて素通りできるもの」

反量子さんの言うとおりだ。

俺は何もできない。

無力なんだ。

愛する人すら守れないなんて、俺はこんなに弱かったのか？

量子さんの生活を奪われたくないのに、何もできないのか？

歯がゆい。

悔しい。

もし量子さんと反量子さんが衝突すれば、対消滅が起きる。

2人はエネルギーに変換されて消えてしまう。

嫌だ。

量子さんがいなくなるなんて。

そのとき、量子さんが俺の肩をそっと掴んだ。

量子「大丈夫」

俺「量子さん……」

量子「私は生きてるし、死んでる」

俺「対消滅は、シュレディンガーの猫とは違うんですよ!？」

量子さんはいつもの無表情のまま、ゆったりと立ち上がり、反量子

さんを見つめた。

反量子「覚悟ができたみたいね。さあ、一つになりましょう」

2人が近づく。

俺は叫び、無我夢中で2人に突進した。

でも、あのときのトラックのごとく、すり抜けてしまった。
トンネル効果だ。

もはやふれることもできないなんて。

量子さんと反量子さんがお互いに腕を差し伸ばし、そして。

あまりにもまばゆい光が俺の部屋に満ちた。

どれくらいの間が経ったろうか。

光が消えたとき、2人の量子さんも消えていた。

俺は言葉を失い、ただ、その場でむせび泣く。

第9話「量子論の何たるかを知っていると云う人は、量子論を理解していない」

つまらない。

何も面白くない日々。

また、灰色。

あれ以来、俺はバイト先でも全然喋らなくなってしまった。

時間があれば、量子との楽しかった毎日を思い出し、過去に浸っている。

ダメだと分かっているけど、どうしようもない。

俺は、こんなにも量子のことが好きだった。

それなのに、あいつのせいだ。

コンビニ弁当を買って、家に帰るただそれだけの毎日。

ドアを開けて、そのたびにドキドキする日は、もう戻ってこないの
だろう。

今日もまた同じ日を消費する。

せめて記憶だけは。

記憶だけは、俺のものだ。

あいつに奪われはしない。

淡い月の光を浴びながら、とぼとぼ歩く。

アパートが見えてきた。

くだらないな。

郵便受けにはピザ屋のチラシだけ。
階段を上がり、ため息をついて、ドアを開けた。

量子「こんにちは」

終

第9話「量子論の何たるかを知っていると云う人は、量子論を理解していない」

奥付け

著者 渡部拓也

ツイッター <https://twitter.com/Nasobemw>

ブログ センス・オブ・ワンダラー <http://d.hate.na.ne.jp/sense-of-wanderer/>

Copyright? 2010 Takuya Watanabe
All Rights Reserved

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2912p/>

量子的な彼女

2010年12月10日17時59分発行